日赤にいがたNEWS

NISSEKI NIIGATA

令和3年11月
発　行

防災特集号

CONTENTS

11月号のテーマは「防災」です。中越大震災での新潟県支部の動きや教訓、個人でできる災害への備えなどをお伝えします。

『赤十字防災かるた』は、児童が遊びながら防災について学べるよう中越大震災、中越沖地震や東日本大震災など災害救護の経験を生かし、日本赤十字社新潟県支部が独自に作成したものです。友人と休み時間や冬休みに自宅等で遊べるよう青少年赤十字加盟校の小学校1年生を対象に贈呈しています。

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　新潟県支部

中越大震災 その時新潟県支部は…

2004年（平成16年）10月23日17時56分に新潟県中越地方を震源として発生した中越大震災から今年で17年。
当時、実際に被災地で活動にあたった支部職員が当時を振り返ります。

10月23日（発災直後）長岡赤十字病院に
スタッフが参集して看護師長の緊急ミーティング

10月27日
最大3千人が避難した小千谷市総合体育館

10月30日
救援物資を被災地へ届ける赤十字ボランティア

当時の活動内容

今ほどインターネットが発達していなかったので、ほとんど情報がないまま被災地へ向かいました。地震の被害で交通が寸断される中、高速道路を逆走したり、通行止めになったトンネルを通ったりすることもありました。

被災地に入ると様々な部署や組織に声をかけ、必死に情報収集と分析に努めました。自分達が集めた情報で日赤全体の救護活動が展開されていたので、いかに早く正確な情報を取得して分析を行い、報告するかが活動のポイントでした。発災からの3日間は徹夜で活動に当たりました。

全国から医療チームが集まる被災地で、より効率的に活動をするために、行政や地元医師会等との密接な連携、各チームが被災地に入る前に活動場所と内容を調整し、医療チーム全体のミーティングを行って情報の共有を図るなど、全国に先駆けた取り組みを行いました。中越大震災をきっかけに、それまで各団体がバラバラに行っていた救護活動をまとめることができました。

被災地での赤十字活動の拠点作りと、被災市町村と協働するための関係作りは、当時29歳だった私にはかなりのプレッシャーでしたが、振り返ってみると達成感もあり、その後の業務への自信にもつながりました。

支部職員 小原大介

個人の備え

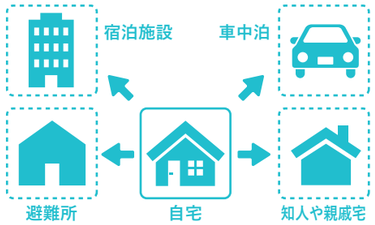
避難時に感染症から身を守る3つのポイント

01 避難するときには分散避難を心がける

少人数・個別空間を確保できる避難先を優先的に選んだり、知人宅やホテルなどを避難先として活用する「分散避難」を心掛けることが大切です。

危険な状況では、直ちに安全な場所に避難する

自宅の安全が確保されていない場合



02 感染防止のために必要なモノを準備する

いつ災害が発生しても持ち出せるように準備しておきましょう。

非常持ち出し袋に入れておく

03 感染リスクを認識する

避難所等での避難生活を送ることになった際には、しっかりと感染リスクを認識し、マスクの着用や毎日の検温など感染防止のための生活ルールを守りましょう。

感染防止のための生活ルールを徹底する

集団で生活する場合の感染症対策

- ●マスク着用、手指消毒の徹底
- ●毎日の体温・体調確認
- ●ふたのあるトイレでは、ふたを閉めて流す
- ●ゴミは各世帯で密閉して廃棄
- ●靴はビニール袋に入れて各自で保管
- ●洗濯は各世帯で徹底

支部の備え

これまでの中越大震災等の経験を生かし、他の機関と連絡調整を行い、より効果的な活動を行うための「日赤災害医療コーディネートチーム」や、身体だけではなくメンタル面をサポートするための「こころのケア要員」の育成にも力を入れています。

また、新潟県支部では、今後発生が予想されている大規模広域災害において迅速な災害救護活動が展開できるように、医療チームをはじめとした救護要員の研修や、被災者のみなさまにお配りする物資の備蓄・管理を行っています。

さらに、災害からいのちを守るために、表紙でもご紹介した「赤十字防災かるた」をはじめとする、児童・生徒が主体的に防災に取り組めるよう、「気づき、考え、実行する」力を重視した防災教材を作成し、県内の学校等で防災教育を行っています。

皆さまのご寄付が唯一の活動財源です。

中越大震災当時に救護活動ができたのは、皆さまからのご寄付があったからです。
日本赤十字社は公平で中立な活動が求められるため、国や県から補助を受けることなく
県民の皆様からのご寄付のみで活動を展開しております。今後もいのちを救うための
赤十字活動が行えるよう、皆さまからの温かいご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

わたしも赤十字 vol.2

中越大震災を経験し、現在赤十字の指導講師として地域での講演活動を通じて防災啓発に取り組んでいる、桑原昭さんにお話を伺いました。

Q1 中越大震災では、どのような体験をされましたか？

突然、下から突き上げるような強烈な揺れを感じ、体がかたまり何もできませんでした。「震度7」の揺れの中では、自分の身を守るので精一杯でした。

当時私は川口町立川口小学校の校長でした。情報が寸断され、全児童の安否確認をするのに1週間も要しました。道路のいたる所が陥没し、約1か月間片道10分の距離に徒歩1時間半。携帯電話やライフラインの停止など本当に大変な状況でした。そして、非常に悲しいことに、6年生の児童が亡くなりました。この経験で、私の防災意識は大きく変わりました。

Q2 中越大震災の経験から、伝えたいことを教えてください。

自分のいのちがあってはじめて他者を救うことができます。伝えたいのは、「最も大切なのは自分のいのちだ」ということです。震災後、いのちを守ることに特化した防災の必要性を全国に伝えていくために、危機意識を育てることに力を注いできました。「教える」のではなく、自分自身で「気づく・見つける」ために、実際起きたことをしっかり伝えるようにしています。このような、いのちへの危機意識を持つことを防災ワクチンと名付け、いのちをまもることの大切さを伝えています。

指導講師　桑原 昭さん

桑原流 防災5つの掟

1. 想定外を想定した防災に取り組む
2. 防災の備えに優先順位をつける
3. シナリオ通りの防災は通用しないと心得る
4. 100%の安全対策はできないと認識する
5. 実践的な緊急時の対応を

普段からやっていないことはできない！

Q3 現在取り組んでいる活動について教えてください。

全国約100か所での講演活動や、おぢや震災ミュージアムそなえ館で震災体験についての語り部、本の執筆等、伝える活動に取り組んでいます。

今の夢は、若い世代を育成し、「防災少年隊」を結成すること。有事に動けるのは体力のある若い世代がメインとなります。将来、子どもたちが核となって防災活動を行えるよう地域に呼びかけ、親子で参加できる仕組み作りが大切だと考えています。

Q4 赤十字に期待することは何ですか？

赤十字の理念は「愛」そのものだと思います。理念を大切にして、人の痛みに寄り添った活動を行っていってほしいですね。そのためにも、時代や価値観の変化をとらえ、適した活動を見極める必要があると思います。

また、赤十字の理念を、若い人や子どもたちに知ってもらうために力を注いでいってほしいです。

事務所 一時移転のお知らせ

10月1日より、新潟市中央区関屋下川原町から下記の住所に事務所を一時移転しました。

〒951-8143 新潟市中央区関屋恵町11-55 NTT東日本関屋恵町ビル2階

※令和5年春、元の住所へ戻る予定です。

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society 新潟県支部

〒951-8143 新潟市中央区関屋恵町11-55 NTT東日本関屋恵町ビル2階

TEL 025-231-3121　FAX 025-231-3122

E-mail humanity@niigata.jrc.or.jp　https://www.jrc.or.jp/chapter/niigata/